

書評

人形遊びに見る「こども」と「人種」：

ロビン・バーンスタイン著『レイシャル・イノセンス』

Robin, Bernstein. (2001). *Racial Innocence: Performing American Childhood from Slavery to Civil Rights*. Hanover, NH: New York

University Press, 2011.

生駒夏美

本書はアメリカ社会における「こどものイノセンス」概念の歴史の変遷を、南北戦争前の奴隷制時代から公民権運動までの膨大な歴史資料を傍証として辿る。著者であるロビン・バーンスタインは、ハーヴァード大学でジェンダー研究、歴史、文学を教え、「ジェンダーとパフォーマンス」という人気の一般教育授業を持っている。パフォーマンス・スタディーズが専門であるが、特に記録に残らない日常のパフォーマンスを扱うのが得意な気鋭の学者である。その彼女の手による本書は、期待に違わず刺激的で独創性に富んでいた。アメリカン・スタディーズに関わる人にはもちろん、パフォーマンス・スタディーズ、文学研究、ジェンダー研究、カルチュラル・スタディーズ、またアフェクト理論に興味のある人に推薦したい。

特に本書の独創的なところは、研究対象の資料として品物を取り上げ、品物がどのように扱われることを前提に作られていて、所有者にどのような感情や行動を引き起こすか、つまりどのような「脚本 (script)」が品物の背後にあるかを、アフェクト理論（身体を通して引き起こされる情動を分析する）を応用して読み取っている点である。扱われる資料は19世紀から20世紀の物語やその挿絵や写真、ラード代替物の宣伝ポスター、トプシー・ターヴィーと呼ばれる人形やハンカチ、陶器など多岐にわたる。本書は、品物の「脚本」とそれを手にした人々の「パフォーマンス」を分析することを通して、記憶の中に散逸した当時の人々の人種意識や子供観、ジェンダー観をあぶり出す。

歴史的な「こども」

こどもの無邪気さ、あるいは無垢なこどもという概念は、19世紀以降の産物だと言われている。ヨーロッパにおいては19世紀初めのロマン主義の頃から、例えばワーズワースのような詩人によって、こどもがそれまで考えられていたような「不完全な小さな大人」ではなく、時に大人よりも優れた「イノセント」で「純粹で罪のない存在」であるという概念が文学化され、広く社会で共有され現代まで続いている。1955年に制作されたスペイン映画『汚れなき悪戯』(原題 *Marcelino Pan y Vino*) など、そのようなこども像の典型であろう。その発生から200年が過ぎ、こどもが大人よりも純粹であるといった考え方や、それ故にその権利を擁護し、性的な事柄や暴力、犯罪、経済的搾取などから守られねばならない存在であるという概念は、それが歴史的・文化的に構築されたものであることは忘却され、あたかも自明の透明な真理であるかのように世界中の多くの社会で流通している。日本においても19世紀末にできた義務教育制度や第二次大戦後にできた労働基準法(年少者の項目)、児童福祉法、青少年健全育成条例などはこの概念を基本として成立しているし、さらには児童ポルノ規制法や淫行条例、また携帯電話のフィルタリング機能など、子供を性的な事柄や知識、そして搾取や暴力、犯罪から守ろうする一連のシステムが派生している。ディズニー製品が代表するようなこども向け商品(玩具や絵本、テレビ番組、映画など)は、それら「大人の世界」の「害悪」から漂白されたものとなっているのが常である(それらの商品が結果的にこども(とその保護者)を搾取しているという「大人の事情」は隠されている)。

しかし本書は現代に流布するそのような「イノセントなこども」観が中立どころか、人種的にも政治的にも偏ったものであることを米国の歴史を遡って示す。「こどものイノセンス」という概念形成に最も影響を与えたイメージとして本書が挙げるのが、1952年出版のハリエット・ビーチャー・ストウによる奴隷解放論の小説『アンクル・トム的小屋』(*Uncle Tom's Cabin*)に登場する少女リトル・エヴァ(Little Eva)である。人種や階級差を超え、友として奴隷であるアンクル・トムを愛し、ひたすら善なるものとして病死するエヴァのセンチメンタルな物語は、成人の黒人奴隷トムと白人

少女エヴァという組み合わせがともすれば示唆するであろうような性的関係性や人種問題を超越/忘却させ、人々の涙を誘った。資本主義の常ながら、人気のモチーフは原作のコンテキストから抽出されて一人歩きしていく。『アンクル・トムの小屋』も盛んに舞台化され、アンクル・トム関連商品（Tomitudes）が続々と誕生するなかで、奴隷解放を訴える作者の意図とはうらはらに、トムの奴隷としての悲惨な人生の物語よりも、この美しく善なるエヴァの物語が前面に押し出されていく。エヴァは人種やジェンダー、階級といった「社会的カテゴリーを超越」（p. 6）する「イノセントなこども」の世界の「イノセンス」そのものとして人々に認識されていったとバーンスタインは論じている。

『アンクル・トムの小屋』のキャラクターたちは非常に印象深く、また汎用性の高い造形をされており、そのために別の文脈に次々と移し替えられていったと本書は指摘する。例えば奴隷解放論をサポートするはずだったエヴァとトムの美しい友情も、奴隷制がこのような美しい人間関係を可能にする素晴らしい制度であると、逆に奴隷制擁護にも用いられたからである。

排除されたもの

エヴァが「イノセンス」の象徴として脚光を浴びたと同時に、その「イノセンス」から排除されたものがいた。本書が第一章で詳細に辿るのは、『アンクル・トムの小屋』に登場し、当初悪行の限りをつくしていた黒人奴隷の少女トプシー（Topsy）の変遷である。彼女は、大衆向け音楽ショー、ミンストレル（minstrel）で喜劇的に演じられてきた黒人少女のキャラクターの伝統を引き継ぐ戯画的な描かれ方をしている。ミンストレルとは白人が顔を黒く塗って、おもしろ可笑しく黒人を演じる差別的なショーであるため、これまで作者ストウの隠れた白人優位主義が現れたものとして批判されてきた。バーンスタインはしかし、改心前のトプシーが「もの」あるいは「彫像」として描写され、その目が人形のような「ガラス状」だったとされている点に注目する（p. 44）。トプシーはエヴァの優しい手に触れられて改心し涙を流すのだが、この物語によってストウは人間として扱われず売り買いされる「もの」=奴隷であったトプシーが、愛によって人間に戻る様子を描い

たのだとバーンスタインは分析する。つまりトプシーとエヴァを黒人と白人、根本的に違うものとして描いているのではなく、本来は二人とも「イノセント」な存在だったのだが、トプシーは奴隷として扱われたことから心を閉ざし人形のようになってしまっていたのだと言うのである。確かにこれであれば、トプシーのモチーフもストウの奴隷制反対論に合致することになる。またストウの小説のタイトルが当初『ものだった男』(The man that was a thing)であったことを考えると、この説は強い説得力を持つ。

だが歴史の中でトムとエヴァの物語が変質したのと同様に、エヴァとトプシーの物語も変質していく。二人のこどもが共通して持つ根本的イノセンスは忘れ去られ、代わりに残ったのは対極性であった。こうして、傷つきやすく病死してしまうイノセントな白人エヴァと、「もの」のような黒人悪童のトプシーという対が固定化していく様子を本書は辿る。舞台ではトプシーはミンストレル風に着画化された極端な形で演じられ、その後の米ポピュラー文化において盛んに登場する差別的な黒人児童像に継承されていく。「イノセントなこども」と言えばエヴァのような白人少女を差すようになり、イノセンスの概念から黒人のこどもが排除されていくのである。

人形と人種の関係

本書の真骨頂はここまで見てきたようなテキスト分析にとどまらない。著者はトプシーが人形として流通し、こどもたちによって遊ばれたことに注目する。人形遊びは基本的には「脚本」を持ったパフォーマンスであると本書は主張する。確かにテレビや映画のキャラクター玩具を我が子が遊ぶ様子を観察すると、そのキャラクターの番組内でのコンテキストにおいて、話した台詞や口調を真似しながら遊んでいる。コンテキストがその玩具の遊び方を指定するのだ。文字化されていないこの「脚本」を分析する手法はジェンダーや人種など社会に埋め込まれた価値観を研究素材とするものには極めて示唆に富む。この手法を使うと、例えばトプシー・ターヴィーと呼ばれる、奴隷制時代に奴隷黒人女性が縫った布製人形からは抵抗の物語が紡ぎだされる。これは腰のところでつながった白人女性と黒人女性の人形であり、スカートをめくると一方が他方に変わるものである。これで遊ぶには「スカー

トをめくる」という行為が必然的に要求されるため、これまでも分析されてきたように、そこに人種交雑や白人オーナー男性による黒人奴隷女性のレイプなどの性的なメッセージを読み込むことが可能となる。本書はそこに新たな解釈を加えている。この人形を用いた「遊び」においては、白人も黒人も同時には出現しない。また白人/黒人の「交替」を行なうことが脚本化されている。従ってトプシー・ターヴィーは人種階層へのコメント、あるいは支配/被支配の一過性を指摘するものである可能性がある。またトプシー・ターヴィーが柔らかい布でできていて、こどもはこれを抱擁して遊ぶことから、奴隷女性が自分のこどもにこの人形で遊ばせたのであれば、その子に白人/黒人を同時に所有させたとも読める。あるいは白人のこどものために縫ったのだとすれば、白人男性のレイプによってできた異母姉妹の存在を密かに仄めかしたとも読める。

この頃から黒人人形は、隷属と暴力の二つの脚本を持っていたと本書は分析する。30年代に書かれた *The American Girl's Book* には人形の作り方が掲載され、そのうちの 하나가黒人人形だった。そこには召使いの服装が指定され、指南書には「黒人人形は召使いとして加えるといいでしょう」(p.203) とあったという。そもそも人形という「人種」が生まれつき人間に奉仕する存在として想像されたのは、まさに南北戦争頃のことであるという。この時期、魂を持った人形たちがご主人様であるこどもの寝ている間に冒険する類いの物語が盛んに書かれてもいる。以来こどもたちは人形を自分の召使い(奴隷)として想像して遊んできた。人形は「もの」と「人間」の境界に位置する。大人の世界で奴隷制廃止や奴隷解放が叫ばれている中、こどもたちは人形遊びを通して「もの」と「人間」の境界を見極めようとしていたのである。

米国内では19世紀末頃からラバーや布製の人形が大量生産された。これらは大陸から輸入されていたこれまでのものと異なり、粗雑に扱っても壊れない作りをしていて、取扱説明書には多少の *rough play* にも耐えるとあったという。これら人形製造業者のほとんどは北部の白人だったが、彼らが多くの白人キャラクターと、マミーやトプシー、ダイナといった名前の黒人キャラクターによって作り出した世界観は南部の奴隷制時代プランテーション

ンのそれだった。本書は、実際にこれらの「脚本」に沿って黒人人形を柱に縛り付けて鞭打ったりお仕置きをした「遊び」の歴史的記録を示している。

より明確に暴力を「脚本」として持った人形としては、「ミス・ダイナーのペン拭き人形」が挙げられている。この黒人人形はカラフルな衣装とターバンという姿だが、スカート下に黒い布を何十にも履いている。これでペンのインクを拭き取るというのだ。またミンストレルの舞台では、黒人少女トプシー（を演ずる白人少女）が黒人人形トプシーを殴って笑いを取っていた。これらの「脚本」は、痛みを感じない黒人＝「もの」という奴隷時代から概念が形を変えて生き残っていることを示していると本書は論じている。

抵抗するこども

人形を「脚本付き」のものとして考えると、「すべてのこどもはこども概念のパフォーマンスにおいて、実力派俳優として立ち現れる」（p. 201）と著者は言う。実際、こどもたちは「脚本」をよく認識して、それに従って遊んでいたのだ。20世紀に入るところには、その「脚本」を拒否するこどもの記録も出てくる。アフリカンアメリカンの少女たちは、黒人人形で遊ぶことを拒否しはじめたのだ。本書が例に挙げるのは1930年代後半にアフリカンアメリカンの心理学者クラーク夫妻が行なった「ドール・テスト」である。米国の学校で実施されていた人種隔離がこどもの精神に悪影響を及ぼしているとして、1950年代にBrown v. Board of Educationの裁判の参考資料ともなった有名な実験である。ここでも「人形」が人種問題の 이슈の最前線に関わってきているのだ。

このテストはアフリカンアメリカンのこどもに白っぽい人形と黒っぽい人形を与え、「良い人形」「悪いことをしそうな人形」「白人のこどもに似ている人形」「黒人のこどもに似ている人形」などを選ばせた後、「あなたに似ている人形」を選ばせるといふものだ。多くのこどもは、「良い人形」に白い人形を選び、「悪いことをしそうな人形」に黒い人形を選んだ。次の人種同定も間違いは少ない。しかし「あなたに似ている人形」のところでは33パーセントのアフリカンアメリカンが白い人形を選び、1パーセントは回答を拒否している。このテストの映像は、多くのこどもが最後の質問で泣き出

す姿を映し出す。クラーク夫妻はこの結果から、アフリカンアメリカンのこどもたちが人種差別を内面化し、自分の人種にポジティブなイメージを持ってなくなっていると結論づけた。ちなみにこの手のテストは現在に至るまでしきりに繰り返されている。

しかしバーンスタインは、このテストが示すものは、こどもたちが人形の「脚本」を理解していることを示しているという。黒人人形に伝統的に付随する隷属・暴力の脚本をこどもたちはよく知っており、それらを拒否しているのだ。だから最後の質問は、自分とトプシーなどの黒人人形を同一視せよというありえないもので、困ったこどもたちは泣くというこどもらしい、そして有効なパフォーマンスで逃れようとしたのだと著者は語る。この分析は非常に面白い。クラーク夫妻は、痛みを感じない黒人＝「もの」という概念を崩すためにこどもたちをわざと泣かせ、その涙を利用したとも言えるだろう。この点で、ストウが『アンクル・トムの小屋』でトプシーに流させた涙と同じ意味を持ってくる。ストウは、奴隷制によって黒人少女が「もの」にされていると主張したわけだが、クラーク夫妻は学校の人種隔離によってアフリカンアメリカンの少女の精神にダメージが与えられていると主張した。そして共にこどもたちの「涙」によって、アフリカンアメリカンのこどもたちも痛みを感じる人間であること（「もの」ではないこと）を示してみせたのである。奴隷制は廃止され学校の人種隔離は憲法違反との審判が下ったのであるから、この手法は成功したと言えるのだろう。

人種とジェンダー

このように、本書が様々なソースを駆使して明らかにするのは、歴史的文献や記録からは散逸してしまうようなパフォーマンスの記憶であり、そこから垣間見える人種やジェンダーの問題である。その意味で本書は非常に独創的で、またその内容は汎用性が高い。

「女の子たちは様々なソースから互いに強め合う台詞付けを受けている。これらの台詞付けが混ざり合って、米国文化のパフォーマンス・ナラティブの脚本を作り上げた。それらは作者がおらず、広く拡散したパフォーマンスなのだ」(p. 205) と著者が言うように、人形遊びに埋め込まれた人種や

ジェンダーについての考えは、肉体的な知となって長くわたしたちに影響を及ぼす。

翻って日本ではと考えると、日本の玩具業界が非常にジェンダー・スペシフィックであることや、輸入物の（ディズニーなどの）キャラクターが無批判に売られていることなどは大きな問題となりうる。1937年以来制作されているディズニー子供向けアニメーション映画において、ヒロインに有色人種が登場したのはようやく1992年になってからのことだし、ハリウッドの子役スターと言えどもまだにシャーリー・テンプルやダコタ・ファニングといった白人の（女）児が圧倒的に多い。日本に暮らすものたちの意識においても「イノセントなこども」の概念において白人/黒人という二項対立が埋め込まれてはいまいか。アジア人など他の人種が無化されていることに鈍感になってはいまいか。また日本のアニメの声優のジェンダー・ステレオタイプは、声で悪役かヒーローか、ヒロインか分かるほど甚だしいし、「イノセントなこども」概念がセクシュアライズされてもいる。こどもによって身体化されるこのような価値観について、もっと分析がなされてしかるべきであろう。なぜなら「イノセントな子供」に誰が含まれ、誰が排除されているのかという問題は、アメリカ文化を享受している他の文化圏の「こども観」を考える上でも極めて重要な問いだからである。

Footnotes

- ¹ 本書は言及する時代によって、黒人、白人、アフリカンアメリカンなどと人種の呼び方を変化させている。この文章でもそれに従った。